



Prometheus Unbound 第二幕：  
Demogorgonの領域へ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉岡, 丕展 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00009937">https://doi.org/10.24729/00009937</a>

# *Prometheus Unbound* 第二幕 — Demogorgon の領域へ

吉岡 丕展<sup>もと のぶ</sup> (信雄)

## I

P. B. Shelley の *Prometheus Unbound*<sup>1</sup> 第一幕は、Aeschylus (525-456 B.C.) のプロメーテウス三部作の一つ *Prometheus Desmotes* [Bound] の枠組みにそって書かれた。続編 *Prometheus Lyomenos* [Unbound] は断片であるが、そこで Prometheus は Jupiter が Thetis との結婚によって生まれた子に滅ぼされるという予見された秘密を明かすことによって Jupiter と和解し、Hercules によって縛めを解かれるという構想であった。Shelley は Prometheus を「人類の擁護者」、Jupiter を「人類の圧政者」(序文) にあて、秘密を明かさなないことによって、Prometheus が Jupiter を滅ぼす、その後で Hercules によって縛めを解かれるという構想に変えた。こうして、第一幕はほぼ原作の第一部にそっているが、第二幕以降は原作から離れて、Shelley 独自の展開を示すことになる。第二幕において、妻の Asia が登場し、彼女の主導的行動が、第三幕での Jupiter 打倒に導いていく。本論では、第二幕での彼女の行動を追ってみたい。

## II

第二幕の理解に必要な限りで、第一幕を概観しておこう。

第一幕、時は夜、次第に朝が明けていく。Prometheus はインドコーカサ

---

1 Shelley の詩作品の引用と言及は、Thomas Hutchinson, ed., *Shelley: Poetical Works*, A New Edition, corrected by G.M. Matthews, London: Oxford University Press, 1973 に拠る。

スの山頂をのぞむ峡谷の氷壁に、3000年の長きにわたって、Jupiter による拷問に耐え続けている。<sup>ひょう</sup>雹まじりの疾風が吹きすさび、氷河の尖った先端が体を突き刺し、鎖が骨に食い込み、時折起こる地震によってくさびが抜けては打ち込まれる、鷲が毎日心臓を食いちぎる、一瞬一瞬が数年にも思われる、眠りのない 3000 年である。拷問は、Prometheus が Jupiter 没落の秘密を明かさな限り、今後もいつまでも続くだろう。しかし彼は明かさなで抵抗を続ける。それはいつか必ず Jupiter 没落の日が来ることを確信し、彼の脳裏にその時が見えている（Prometheus はギリシア語で 'forethinker' を意味する）からである。

(1) And yet to me welcome is day and night, ...

... for then they lead

The wingless, crawling hours, one among whom

— As some dark Priest hauls the reluctant victim

Shall drag thee, cruel King, to kiss the blood

From these pale feet, which then might trample thee

If they disdained not such a prostrate slave. (I, 44-52)

この認識があるから、Prometheus には来るべきいつ終わるともしれない苦しみの日々にも喜び(welcome)がある。心臓は毎日食いちぎられても、そのつど再生してきたのである。後に、キリスト教の歴史（人々はイエスの教えない、イエスの名を借りた神という虚構に支配される奴隷となっている。）とフランス革命の経過（自由、平等、兄弟愛の理念に立つ共和国が殺戮と恐怖の国となり、皇帝に支配される国になった）を二つの最大の致命的な拷問として見せつけられても、この認識はかろうじて不動である。

(2) ... though dread revenge,

This is defeat, fierce king, not victory.

The sights with which thou torturest gird my soul

With new endurance, till the hour arrives

When they shall be no types of things which are. (I, 641-645)

Prometheus の眼に映る、Jupiterを「引きずりおろす時」(the hour)とは、現在までの歴史の窮状が払拭され、忘却された新たな時代であることを示唆している。

### III

第二幕、Prometheus の妻 Asia はインドコーカサスの氷結した谷間で、Prometheus が縛られている氷の峡谷のはるか下方の山麓で、Prometheus が縛られて以来ひとり追放の身で、春の到来を待ちわびている。今ようやく春が訪れようとしている。そして山頂から、夜明けの真っ赤な空を縫って差し込むバラ色の光線に乗って妹 Panthea が、Prometheus からのメッセージを持って来る。

Asiaはそれを一日千秋の思いで待ちこがれていたのである。メッセージの第一は、Prometheus の微笑であり、それは彼の微笑が現在までの荒廃した世界を照らす光となって、世界は晴れやかになる、そして二人はそこで再会する、というものである。第二のメッセージは、Panthea の瞳に映っている、風に髪をなびかせ、荒々しく、素早い眼差し (its regard Is wild and quick) の者で、それは露を帯びた空気と呼ばれている ('tis a thing of air, For through its grey robe gleams the golden dew Whose stars the noon has quenched not)。それが 'Follow, follow!' と命令して、消える。この命令の指示する箇所には第二のメッセージがあるのであろう。二人は、かつて同じ 'follow' の声と文字を聞き、読んだが、その時は無視したことを思い出す。ある早春の朝、二人がこの草原を歩いていた時、アーモンドの花びらや、紫色の山肌に映った雲の影にその文字が刻まれていて、松林を吹き抜ける風の音の中にもその言葉が聞かれた。彼女らの思い出話の中に使われた語 'follow' が遠くの崖に「こだま」(echo) する。それは、初めはかすかな、露の

光のようにすぐに消え去る単独の Echo である。しかし次第に多数化し、Echoes の誘いは甘美な調べの歌になり、内容はもっと明確になる。

(3)

*Echoes.*

O, follow, follow,  
 As our voice recedeth  
 Through the caverns hollow,  
 Where the forest spreadeth;  
 (*More distant*)  
 O, follow, follow!  
 Through the caverns hollow,  
 As the song floats, thou pursue,  
 Where the wild bee never flew,  
 Through the noontide darkness deep,  
 By the odour-breathing sleep  
 Of faint night flowers, and the waves  
 At the fountain-lighted caves,  
 While our music, wild and sweet,  
 Mocks thy gently falling feet,  
 Child of Ocean! (II, i, 173-187)

Echoes が指示し、やがて Asia たちが従っていくことになる道筋は、洞窟、巨木の茂る昼なお暗き森、泉が光っている洞窟、さらに湖、幾重もの高い山々、であり、そこを過ぎると目的地、「知られざる世界」であり、そこには Asia が入り込むことを待って発せられる声が眠っている。

(4)

*Echoes.*

In the world unknown  
 Sleeps a voice unspoken;

By thy step alone  
Can its rest be broken;  
Child of Ocean! (II, i, 190-194)

この声の中に第二のメッセージの内容があるのであろう。そして山々の彼方の目的地、知られざる世界とは火山の割れ目である。

(5) O, follow, follow!  
Through the caverns hollow,  
As the song floats thou pursue,  
By the woodland noontide dew;  
By the forest, lakes, and fountains,  
Through the many-folded mountains;  
To the rents, and gulfs, and chasms,  
Where the Earth reposed from spasms,  
On the day when He and thou  
Parted, to commingle now;  
Child of Ocean! (III, i, 196-206)

3000年前 Prometheus が人類に火を与えた罰でインドコーカサスの氷壁に縛られ、Asia は引き離されてコーカサスの麓の谷間に追放された時、母親の地球は苦しみで大噴火した。現在、火山は休止している。今、Asia が Echoes の誘導に従って母親のふところに入れば、そして発せられざる声(a voice unspoken)を触発すれば、二人は再会できる道がある。

ここで Panthea が運んできたメッセージを整理すると、第一は、Prometheus の微笑が世界を一新させ、そこで二人が再会できる、第二は、もし Echoes の誘導に従うなら、そして地球の割れ目に入って、待っている声を発しさせたら、二人は再会できる、ということである。二つのメッセージは別のものでなく、同一の事柄に関するものである。第二のメッセージは、

第一の内容を実現させる道筋、方策を示唆したものである、ということになる。

Echoes からのここまで明確になったメッセージを了解した時点で、最初は無視した二人であるが、話し合った末、ようやく Asia は、共に長い旅路に出ようと決意するにいたる。

(6) *Asia. Come, sweet Panthea, link thy hand in mine,*  
*And follow, ere the voices fade away. (II, i, 207-208)*

なお、引用 3,4,5 で、‘Child of Ocean’ という呼びかけは、アシアーはオーケアノス（大洋）の 3000 人の娘で海のニンフたち、オーケアニスの一人であるというギリシア神話を踏まえたものである。Panthea は山頂から朝日に乗って春風と共に飛んできた露もしくは霧であり、もう一人の妹 Ione は ‘sea-sister’ (II, i, 57) と呼ばれている。加えて、‘Follow!’ とささやいた Echo も露を帯びた空気と言われていた。従ってそれも霧である。

#### IV

Asia たちがたどった道程は、次の第 2 場で、‘Spirits’ のコーラスと住民 Faun たちの対話において記述、解説される。

美しい二人が通る森 (*A Forest, intermingled with Rocks and Caverns.*) はヒマラヤ杉、松、イチイ、などの巨木や古木が鬱蒼と茂り、太陽も月も風も雨もほとんど差し込まない。時折、夜空を彩る無数の星の一つが枝葉の隙間から一瞬差し込むだけである。苔むした地面を這う微風に乗って樹間を彷徨う霧が月桂樹やアネモネを濡らしていく。

この濃密な森に濃密な音楽が充満している。昼中、ナイチンゲールが雌鳥をうっとりさせる甘い恋の歌を歌ったかと思うまもなく別の鳥がその歌を引きついで、途切れなく甘美な歌声が聞こえて森中が聞きほれている。歌声の甘美さは極まって痛みを覚えるほどである。

また、こだまの声も聞こえてくる。これは、Asiaたちを導くこだまであり、かなり音量が増している。このこだまの歌は、ナイチンゲールの歌のこだまなのか、別の音源からのものかは分からない。こだまについての記述を見よう。

(7) *Semichorus I [of Spirits].*

There those enchanted eddies play  
Of echoes, music-tongued, which draw,  
By Demogorgon's mighty law,  
With melting rapture, or sweet awe,  
All spirits on that secret way;  
As inland boats are driven to Ocean  
Down streams made strong with mountain-thaw:  
And first there comes a gentle sound  
To those in talk or slumber bound,  
And wakes the destined:<sup>2</sup> soft emotion  
Attracts, impels them; those who saw  
Say from the breathing earth behind  
There streams a plume-uplifting wind  
Which drives them on their path, while they  
Believe their own swift wings and feet  
The sweet desires within obey:  
And so they float upon their way,  
Until, still sweet, but loud and strong,  
The storm of sound is driven along,

---

2 この詩行の句読点は、P. H. Butter, ed., *Alastor and Other Poems, Prometheus Unbound with Other Poems, Adonais*, Plymouth: Macdonald & Evans, 1970, p. 111 に従った。

Sucked up and hurrying: as they fleet  
 Behind, its gathering billows meet  
 And to the fatal mountain bear  
 Like clouds amid the yielding air. (II, ii, 41-63)

Asia たちを導くこだまの音が、音量、音質（音楽性）を漸次高めている。最初は「ひとつの優しい音」(a gentle sound)が眠っている者、会話する者たちの眼を覚ます。Asia は最初冬の谷間で追放され、恐らく眠っていた。春の到来と共に飛来した Panthea と語らっている時に、'Echo'(II,i, 162), 'some being' (II, i, 164) - いずれも単数形で表示されている - が 'Follow, follow!' と誘った。それを追ううちに、'echoes'の群れとなり、「音楽の調べを持つ、こだまの魅せられた渦」となってたわむれている。渦は、Demogorgon の強力な法則によってすべての 'spirits' を有無を言わず引きつけるとともに、とろけるような陶醉と甘い畏れによって魅きつける、あの秘密の道、火口へと。Demogorgon とは火山の奥で「声」を発しようとするものであることが後に分かる。増大するその歌声の渦はやがて「音の嵐」となって火口に向かう。音量と音楽性の高まりは止まる気配はなく、加速しており、火口に近づくにつれて気が遠くなるような高さに達する勢いである。

森の中にはこの歌声を「見る」能力を持つ者がいる。彼らの証言によれば、地球は火口において呼吸しており (breathing earth)、<sup>3</sup> 翼を吹き上げる風を

3 ルネサンス期の気象学 (meteorology) は、対象とする大気現象の中に、雲、稲妻、霧、などの他に流星 (meteor) や彗星も含めていた。さらに、地球は文字通り 'breathing earth' であり、流星、彗星、虹、稲妻、雲などすべてを放出したり、吸入したりしているという考え方が、当時まだ支配的であった。Shelley はその考え方に従っていたことを Wasserman は指摘している (E. R. Wasserman, *Shelley: A Critical Reading*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1971, pp.328-329.)。また、火山は地下から海水が火道に入り込んで、マグマと混じり合った時に起こる爆発であるという古代からの考えも有力で、Shelley はこの考えに立っていること、そして、*Prometheus Unbound* で、大洋の娘 Asia たちが火口に吸い込まれれば、必然的に噴火であることを G. M. Matthews は示唆している。("A Volcano's Voice in Shelley," George M. Ridenour, ed., *Shelley: A Collection of Critical Essays*, N.J.: Prentice-Hall, 1965, pp. 120ff.

呼気として吐き出しており、Asia たちを駆り立てる歌声の実体はこの風である。こだまは Asia たちを巻き込み、駆動するある、触ることができるほど濃密な、風であり、続いて地球の吸気となって、まわりの蒸気を引きつけ、大波となり、雲にふくれ上がり、嵐となって、前方の空気を押し分け、「運命の山」に向かっていく。Asia と Panthea がこれの作用を受けたのは、彼女らの実体が大洋の子—水、蒸気—であったことによると考えられる。逆に、これは Asia と Panthea だけの単独の経験ではなく、まわりには彼女らと同じように歌を享受して、行動を共にする無数の同類がいると推察される。こだまによって連絡し合い、かつこだまの塊を形成する、ある同類の大集団が「運命の山」を目指しているのである。

こうして見ると、Panthea の便りを受けた Asia が Panthea と共に森を通過して、山々を越え火口に向かう道程は、火山から吐き出され、吸い込まれる風、水蒸気、雲の動きとして捉えることができる。

ここで、立ち止まって、この音楽の雲と、森に鳴りひびくナイチンゲールの恋歌とは同じものだろうか、それとも別のものだろうか、これを調べるために、振り返って、風、水蒸気、雲の動きそのものをたどってみたい。

風はインドコーカサスの氷結した峡谷から谷間に吹き下ろしてくるらしい。その「嵐に抱かれて」春 (child of many winds) が谷間に下りてくる。同時に、山頂からさす一筋の曙光に乗って Panthea が Asia の許に飛来する。春とは春風、暖気であろう。Panthea はその一部をなしていたのである。

- (8) ... and through yon peaks of cloud-like snow  
The roseate sunlight quivers: hear I not  
The Aeolian music of her sea-green plumes  
Winnowing the crimson dawn? (II, i, 24-27)

Panthea はかつて峡谷の Prometheus のそばで氷結していた。今は、春の雪解けで解放された水滴、露、また 'sea-green plumes' といわれるように、た

なびく霧である。

次に Panthea の眼の中に現れ、‘Follow’と叫んだ Dream は強風に煽られる気化した露である。

- (9) What shape is that between us? Its rude hair  
Roughens the wind that lifts it, its regard  
Is wild and quick, yet 'tis a thing of air,  
For through its grey robe gleams the golden dew  
Whose stars the noon has quenched not. (II, i, 127-131)

こうして Echo → Echoes と増強し、Panthea と Asia 共々春風の一団となつて、森に入っていく。

- (10) The path through which that lovely twain  
Have passed, by cedar, pine, and yew.  
And each dark tree that ever grew,  
Is curtained out from Heaven's wide blue;  
Nor sun, nor moon, nor wind, nor rain,  
Can pierce its interwoven bowers,  
Nor aught, save where some cloud of dew,  
Drifted along the earth-creeping breeze,  
Between the trunks of the hoar trees,  
Hangs each a pearl in the pale flowers  
Of the green laurel, blown anew;  
And bends, and then fades silently,  
One frail and fair anemone: (II, ii, 1-13)

ここで、森に入って、Echoes に誘われて樹間を通った二人と、地を這う風に乗って樹間をさまよう露の雲（春風）は別のものではない。後者は前者を誘

う Echoes の実体であり、前者はその一団に吸収されているのである。ここでは彼らの音楽は聞こえない。森の樹上からナイチンゲールの濃密な歌声が森に充満しており、それに圧倒されているからである。しかし、彼らは彼らなりに、恐らく低い音楽を発しており、これが ‘enchanted eddies . . . Of echoes, music-tongued’ (引用7) に高まったと推測される。

こうして見ると、ナイチンゲールの歌と Echoes の歌は別の二つの歌であると解される。更に、森には第三の歌も流れていることが二幕二場の Fauns の対話によってうかがわれる。

(11) *Second Faun.* . . .

But, should we stay to speak, noontide would come,  
And thwart Silenus find his goats undrawn,  
And grudge to sing those wise and lovely songs  
Of Fate, and Chance, and God, and Chaos old,  
And Love, and the chained Titan's woful doom,  
And how he shall be loosed, and make the earth  
One brotherhood: delightful strains which cheer  
Our solitary twighlights, and which charm  
To silence the unenvying nightingales. (II, ii, 89-97)

濃密な森は音楽の森である。そこでは、第一、第二に加えて第三の歌が聞こえてくる。それは森に充満し住人を酔わせていたナイチンゲールの甘美な歌さえ沈黙させるような、「知的な、美しい歌」であり、その歌とは、縛られた Prometheus の苦悩、彼の解放、一つになった新世界の実現を歌った、つまり、今読者が読んでいる *Prometheus Unbound* であるらしい。

Matthews は恋歌を歌うナイチンゲールの描写 (II, ii, 25-41) の中に *Twelfth Night*, *Faerie Queene* などの反映を認め、ナイチンゲールは Spenser, Shakespeare, Milton, Gray などの “poets” or imaginative thinkers’ に言及する、そして引用10の ‘frail anemone’ は Shelley だろうと推察

している。しかし、Shelley に関しては、むしろ上の Silenus の歌がそれに当たるように思われる。そうだとすれば、この音楽の森はこれらの詩が享受される英国社会、ないしは、翻訳による伝播が可能な限りにおいて英国社会を中心とした世界を言及していると解される。それにしても、「森」の描写は当時の実際の社会とかなりギャップのある社会描写だと言わねばなるまい。Silenus はギリシア神話のシレノスー森の神々 fauns の長で酒神 Bacchus の養父、教師、従者であり、年齢的に Shelley と合わない。また、Shelley は *Prometheus Unbound* を理解する人は数人だろうと予想し、事実難解で不評であった。<sup>4</sup> しかし、「社会」をもっと広く取るならば、Silenus は作者と取る必要はない。いつの日か、詩を理解する人が現れて、上記の詩人たち以上にそれを愛読する社会が現れるだろうという希望、ないしは皮肉がこめられていると解される。事実、今まだ第二幕冒頭と同じく山頂に朝日が覗いたままで、この状態はもっと後まで続く。ここでは時間がいわば収縮している。Faun たちは、正午(noon)になれば、と言っているのである。ここで正午とは、かなりの時間が経過した将来ということになる。

---

4 Seymour Reiter, *A Study of Shelley's Poetry*, The University of New Mexico Press, 1967, pp. 93ff. Reiter によれば、19世紀の英国の長編詩の中で最も難解で最も読まれなかったものは *Prometheus Unbound* であった。これを含んだ詩集は 20 冊以上売れないだろうと Shelley は出版社に書き送っている。二年後、'Prometheus was never intended for more than 5 or 6 persons' と語った。出版の数か月後、七つの評論は酷評であるか、好意的にしても理解していなかった。同時代人は、妻 Mary と Leigh Hunt も含めて、誰一人彼を理解しなかった。Holmes によれば、総じて、Shelley の詩作品は、作者ともども、「ロンドンの上品な社会において口にするものはばかられる」ものであった (*Shelley - The Pursuit*, London: HarperCollins, 1974, 1995, xiv.)。例外は *Queen Mab* (1813) で、印刷されたが、内容が過激なため、出版を見合わせられ、70名ほどの個人に郵送されたままになっていたが、1821年以降海賊版が次々と出回り、大量に売れ、安価に配布されて、ひそかに労働者層に読まれ、恐らく19世紀で最も多く読まれた長編詩になった。山羊を引く Fauns (II, ii, 90) とは労働者、歌を歌い、聞きいる nightingales は英国社交界と解することができる。Silenus の歌う Prometheus の物語に聞き入る Fauns の姿は、*Prometheus Unbound* の受容には適合しないが、その出版の3年後以降に現出する *Queen Mab* の受容の状況にまさに合致している。ちなみに、第三幕以降で記述される理想世界(the earth One brotherhood(II, ii., 94-5))は *Queen Mab* のそれと同一である。

さて、「森」に流れる三つの音楽の内、Asia たちは一貫して第二の Echoes の歌を追求する。こうして森を出て山々を通り、ついに火山の噴火口をのぞむ高い山の頂きに達する、というより、勢いを得た Echoes の「響き」によって運び上げられる。

(12) SCENE III. — *A Pinnacle of Rock among Mountains.*

ASIA and PANTHEA.

*Panthea.* Hither the sound has borne us — to the realm  
Of Demogorgon, and the mighty portal,  
Like a volcano's meteor-breathing chasm,  
Whence the oracular vapour is hurled up  
Which lonely men drink wandering in their youth,  
And call truth, virtue, love, genius, or joy,  
That maddening wine of life, whose dregs they drain  
To deep intoxication; and uplift,  
Like Maenads who cry loud, Evoe! Evoe!  
The voice which is contagion to the world. (II, iii, 1-10)

Asia と Panthea がはるかに見下ろした火口とおぼしきところから地球の呼気が上昇してくる。(それはやがて、またたくまに、超高速で Asia たちを巻き込み、上昇を続け、次に 'Down, down!' という最大の轟音となって下降するのであるが、ここではスローモーションにして読まなければならない。) この蒸気は地底から轟音を響かせて吹き上げられる 'oracular vapour' である。森での甘美さと陶酔がここでは狂的に高まっている。若者たちがその「生のワイン」を飲むと、「真理、徳、愛、本質、喜び」と呼び、熱狂して叫ぶ「声」となる、この声、熱狂が全世界に伝染し、伝播する。火口の奥深くで Asia たちを待つ「声」(引用 4) もこのような声なのだろうか。

上の火山と蒸気についての Panthea の記述に対して、Asia は振り返って旅路の全景を俯瞰し、そのようなことを引き起こす力 (Power) に似つかわしい

玉座だ」と感嘆する。長くなるが引用して検討したい。

- (13) *Asia*. Fit throne for such a Power! Magnificent!  
 How glorious art thou, Earth! And if thou be  
 The shadow of some spirit lovelier still,  
 Though evil stain its work, and it should be  
 Like its creation, weak yet beautiful,  
 I could fall down and worship that and thee.  
 Even now my heart adareth: Wonderful!  
 Look, sister, ere the vapour dim thy brain:  
 Beneath is a wide plain of billowy mist,  
 As a lake, paving in the morning sky,  
 With azure waves which burst in silver light,  
 Some Indian vale. Behold it, rolling on  
 Under the curdling winds, and islanding  
 The peak whereon we stand, midway, around,  
 Encinctured by the dark and blooming forests,  
 Dim twilight-lawns, and stream-illumèd caves,  
 And wind-enchanted shapes of wandering mist;  
 And far on high the keen sky-cleaving mountains  
 From icy spires of sun-like radiance fling  
 The dawn, as lifted Ocean's dazzling spray,  
 From some Atlantic islet scattered up,  
 Spangles the wind with lamp-like water-drops.  
 The vale is girdled with their walls, a howl  
 Of cataracts from their thaw-cloven ravines,  
 Satiates the listening wind, continuous, vast,  
 Awful as silence. Hark! the rushing snow!  
 The sun-awakened avalanche! whose mass,

Thrice sifted by the storm, had gathered there  
Flake after flake, in heaven-defying minds  
As thought by thought is piled, till some great truth  
Is loosened, and the nations echo round,  
Shaken to their roots, as do the mountains now.

(II, iii, 11-42)

(この一節は、シンタクスが複雑で、分かりにくい箇所もあるので、日本語で大意を付しておく。)

このような力に似つかわしい玉座だ、素晴らしい。  
地球よ、あなたは何と輝かしい。そしてもしあなたがあるもっと美しい本質をなすものの影だとしたら、なるほどその作り出したもの（あなた）は悪に汚され、その本質は、その作り出したものと同様弱くて美しいものかもしれないが、ひざまづいてそのものとあなたを拝みたいくらいだ。  
今、私は心からあなたが大好きです。素敵だ。  
妹よ、ご覧。蒸気があなたの脳を曇らさないうちに。

下は、もやが大波となって、広い平原のように広がっている。  
もやは、湖のように、朝の空の中で、銀色に光って砕け散る空色の波となってインドコーカサスの谷間を飾っている。ほら、もやの波は、凝固する風に吹かれてさかまきながら上昇し、私たちの立つ山の頂きを島のように孤立させようとしている。山の中腹はぐると帯状に、花の咲く暗い森と霞んだ薄明かりの草原と、流れが光っている洞窟と、風に魅惑されてさまよう霧たちのすがたによって囲まれている。

そして、はるか高くに、鋭い、空を切り裂くような山々が太陽のように光り輝く氷の尖った頂きから夜明けの光を投げかける。大西洋の島の岸辺から飛び散った大洋のきらきら光るしぶきが、上昇して、ランプのような水滴となって、風をぴかぴかに散りばめている。

あの谷間は山々の峡谷の壁によって囲まれている。  
 雪解け水の峡谷の滝の吠えるような轟音が充満して、  
 あの激しい風たちでさえしんと聞きいつている。滝の音は途切れなく、  
 広大で、静寂のように畏ろしい。... は、どーと落ちてゆく雪！  
 太陽に目覚まされた雪崩！ その氷の塊は、雪が嵐によって幾度となく  
 篩ふるいにかけられ、積み重ねられたものだ。その雪片の一枚一枚は、まさに、  
 天に挑む精神たちの中で、思想が一段一段と積み重ねられていくうちに、  
 やがてある偉大な真理が確立し、動き出す、するとまわりの諸国民が  
 精神の根底まで揺さぶられ、共振するにいたる、そのさまに見える。  
 今山々は雪崩の連鎖反応ででんぐり返らんとする気配だ。

この一節は、これまでの Asia と Panthea の長い旅路—インドコーカサスの谷間→音楽の森→山の頂きまでの遠大な広がりを一望のもとに眺め、さらにそれらをつつむ山々、山々のかなたの大洋までをカバーするパノラマを形成している。ここには火山と氷河を抱く高峰群が同居している。音楽の森と火山の描写は、ヴェスピアスと周辺の地方の観察からとっている。<sup>5</sup> 峡谷と氷河と雪崩の記述はモンブランとシャモーニの観察からとっている。<sup>6</sup> パノラマは、これに大西洋、インドコーカサスとスキタイまでの草原の想像された記述を加えて配置し、全体の広がりと高さを思い切り拡大、誇張した世界像にしている。それに春の陽光と緑と花々、もやなどを散りばめ実にカラフルである。全面が湖水のように、さまざまな濃淡と色彩の霧、もやに彩られている。霧は音楽の存在を暗示している。霧は次第に「凝固する風」になり、Asia たちの山の頂きに迫る。また、かなたの山々の峡谷を吹きすさぶ強風になる。

5 1818-19年、Shelley はヴェスピアス山とその周辺、ナポリ近郊の森、休火山、噴気孔、間歇泉、クレター、湖、洞窟などをつぶさに観察している。その様子を G. M. Matthews, op. cit. は綿密に跡づけている。

6 1816年夏 Shelley の一行はシャモーニに行き、第一夜のホテルで、雪崩の轟音を聞いて驚き、峡谷、氷河とモンブランの山頂を見て、強烈な衝撃を受けている。その時、“Mont Blanc”を書いている。

それをかき消す滝の轟音、それすらかき消す雪崩の恐ろしい響き、雪崩が全ての山々へと波及する予感—多彩な世界は音楽に満ち満ちた世界でもある。

このような 'Earth' を前にして、Asia は、若者たちに「真理」云々と叫ばせ、世界に伝播する声となる「神託の蒸気」を発する火山の主 Demogorgon を指して、「そのような力に似つかわしい玉座だ」と、Earth に感嘆している。美しい Earth は、より美しいもの Demogorgon の影であり、玉座である。そして、「心から大好きだ」と熱愛の叫びをあげている。

Asia の眼に映った世界を順次追ってみよう。まず、眼下のはるか前方に、Asia が追放されていたインドコーカサスの谷間とおぼしきものが広がっている、昼なお暗い、花の咲く森—あの音楽の森—と草原、洞窟などは、彼女らが立つ山のはるか下方の山すそを形成している。そして、上空はるかかなたに、空を切り裂くような、「天に挑む」ような鋭角の山々の頂きが林立している。それらの高峰の、氷河を抱く峡谷も見える。この峡谷の壁面のすそ野の一つが、インドコーカサスの谷間である。

Asia がいた谷間のはるかかなもやがかかっている（おそらく 'Follow, follow' とささやきながら）。森ではもやは凝縮して霧に化して、動きを速め、濃厚な音楽をかなでている (Under the curdling waves)。そして頂上むけて逆まきながら上昇してくる。

そして、はるか前方の上空にインドコーカサスの山々が、太陽と見まがう、まばゆい氷の頂きから霧の湖に曙光を投げかけている。氷の頂きは、火山の放り上げた水蒸気の他に、大洋のしぶきが大西洋の島から打ち上げられ、気化して上昇し、冷却され雪となってしんしんと降り積もったものである (Flake after flake)。従って、霧の湖は三つの源からの合流である。一つは、峡谷から谷間、森へと上昇し、山頂へと Asia たちを運び上げた春の暖気、もう一つは火口から吹き上げる神託の蒸気、三つ目は大西洋の島から大洋が放り上げて気化した蒸気。この三つが合流して春の暖気を形成している。そのような蒸気の湖が、朝日にきらきら光る氷の山頂から今まさに差し込む曙光に照らされきらきらと金色に輝いている (Spangles the wind with lamp-like water-drops)。

山頂に降り積もった雪はゆっくりと氷河の流れを形成し、これが何百、何千年もかかってゆっくりと流れながら、Prometheus の近くで亀裂し、雪崩を形成し、大地を揺るがして転げ落ちるものもある。他の峡谷では、雪崩とはならず、雪解け水の滝 (cataracts) となって落下し、激流となって流れ落ちるものもある。そのひとつは、やがて Asia のいる谷間を通るものもあるだろう。

ここで Asia たちの通ったより大きな道筋が明らかになる。山頂から朝日がさしこみ霧の海を照らす光景は第二幕初めで春の到来を待つ Asia の谷間に春の曙光がさし込むさまを再び見たものである。その春の曙の光線に乗って、春の暖気と共に Panthea が飛来した。Echo もその一部であった。それは髪を風になびかせた空気であり、灰色の衣に金色の露が光っていた(II, i, 127-130)。Panthea と Echo は Ocean (Oceanus) の娘たち (spray, Oceanides) であり、氷の山頂、氷河を形成し、長時間(3000 年間) Prometheus の傍らにいた後、寒風に包まれて飛来する春と共に (From all the blasts of Heaven thou hast descended; Cradled in tempests; child of many winds [II, i, 1-6]) 待ちに待った Asia のもとへ飛来したのであろう。Asia, Panthea, Echo, Echoes は、大洋→島あるいは火口→上空→山頂→峡谷→谷間→森→火口を望む山頂へと循環している霧の流れである。そして今、全景を覆う霧の湖は、やがて Asia たちをも飲み込む(もしくは、Asia たちがその先鋒となる) 春風、春の暖気の集合体である。

上の経路の中で峡谷のあたりの疾風と滝の轟音に Asia の注意は引きつけられる。ここは Prometheus が縛られている峡谷の氷壁である。そこで彼は崩れた氷河の先端で貫かれ、雹<sup>hail</sup>と疾風に吹きざらしになっているはずである。その少し下流で、雪解け水の激流を形作る、耳をつんざくような滝の音が、雹と強風を上まわる轟音となっている。さらにその滝の音さえかき消すような雪崩の震撼すべき音も響いてくる。それらの唸り声、轟音が、もっとも長距離にいる Asia たちに、第一幕の Prometheus のいる峡谷でと同じ臨場感で、聞こえている。

ここ峡谷で、突風さえ静まらせる滝の唸り(a howl Of cataracts) とは何

か。さらにそれよりも大きな轟音を響かせる雪崩の連鎖反応とは何か。恐らくそれもある種の音楽であるのだろう。Prometheus がいるところでは、雪片が一枚一枚と、気が遠くなるほどの年月と反復を重ねて氷河を形成していく。これも、Asia や Panthea や水蒸気と同じく水の一つの形態である。したがってそれもそれなりにある低音の音楽をかなでているのであろう。とすれば、一枚一枚と蓄積される雪片、氷河は Prometheus の実体をなすものと考えられる。(彼は Earth の息子であるが、ここでは Earth は Asia も含めて全ての者の母親である。)

山頂で雪片が蓄積し氷河の流れを形成する過程は、天に挑む精神の中で[in Heaven-defying minds]、思想が一段また一段と積み重ねられ、真理が構想され、ある社会的変動の基礎となることにたとえられており、真理と変動が諸国民に伝播し、連動するさまは、雪崩が共振(echo)によってまわりの山々に波及するさまにたとえられている。雪崩が起こる峡谷の氷河での革命と思想への言及は、森の中のナイチンゲールの歌、実作品 *Prometheus Unbound* への言及と対応するように思われる。つまり、峡谷は森と同じように英国、ないしは英語圏を中心とする世界であり、そこでは何千年にわたって骨身を削るような努力で、思想家たちが変動の基礎となる思想を営々と築き上げている。Prometheus = 氷河 = 思想家たち。

氷の峡谷においては二種の音楽が流れている。思想家の活動を表す雪片の蓄積。これは低く抑えられた、しかし力強い、持続する音楽である。もう一種は天からひゅうひゅうと叩きつける雹ひょうの音や唸る疾風の不協和音である。後者が前者を圧倒している。しかし、蓄積する雪片が重さに耐えかね、亀裂し、崩壊する、雪解けによって滝を激流する時、勢力は逆転する。滝の轟音に疾風の唸り声が黙ってしまう(the listening wind)。

こうして確立された真理が引き起こす変動とは、例えばフランス革命のようなものだろうか。また真理とはどんな真理か。それを作り上げた思想家とは誰か。

答えるのに先立って、Asia たちが俯瞰する世界 Earth をもう一度整理すると、この世界はインドコーカサスの谷間、音楽の森、インドコーカサスの

峡谷などを含む。それは Panthea と Asia の旅の全経路を含む。そして音楽の森自体が世界であった。峡谷もまた世界である。この世界は部分の総計であるが、部分がまた全体の世界を含んでいる、そういう不思議な(wonderful! [117])世界である。水蒸気としての Asia たちの旅は、大洋→山頂 ... への空間的移動であるが、その中に住む人々、諸国民としての Asia たちの旅は空間的移動でない変化—それは3000年という時間的位相の変化を表しているように思われる。

Asia たちが不思議な世界に感嘆し、畏れおののいている短い間にも、中腹まで吹き上げた蒸気は、真っ赤な泡となって砕け散る霧の突風となって、彼女らの足元にまで迫っているかと思うまもなく、もう彼女らの眼まで覆い、脳は眩惑される(my brain Grows dizzy)。霧の一つ一つが金色の髪から青い火が燃える空気(spirits)であり、火口の奥深くへと微笑みながら招く(beckoning smiles[彼らは以下 'Down, down!' と大声で歌いながら、'Follow!' という語をジェスチャーで示しているのである])。魅惑的な招きの声が霧の突風の音楽的な轟音であり、その轟音が以下の引用の詩句となって響いていることに留意すべきである。

(14)

*Song of Spirits.*

To the deep, to the deep,

Down, down!

Through the shade of sleep,

Through the cloudy strife

Of Death and of Life;

Through the veil and the bar

Of things which seem and are

Even to the steps of the remotest throne,

Down, down!

(II, iii, 54-62)

こうして彼女らは強制的かつ熱狂的に地球の奥深く Demogorgon のもとへ突

入する。‘down’は空間的移動だけでなく、dizzy → sleep という意識の変化、生と死と存在の根源への探究を意味していると告げている。どのような移動なのか。これを知るためにも、我々はさきの、世界を俯瞰する場所（引用13）に留まり、峡谷の世界をもう少し見ておきたい。しかもそこからでも遠すぎるので、第一幕にもう一度戻って、かつ世界を俯瞰するときの複眼的視点（[Asia = 霧 = 人々]、[森 = 世界]、[Prometheus = 氷河 = 思想家たち]、[峡谷 = 世界] という見方）を保持して眺めて見たい。

## V

インドコーカサスの峡谷で Prometheus は何をしているのだろうか。Heaven-defying minds は何をしているのか、または、Asia が情報を得て、火口を望む頂きまで移動した時間を考慮すると、何をしていたのか。世界で何が起こり、起ころうとしている（いた）のだろうか。

峡谷の氷壁で Prometheus は、ひゅうひゅうと雹が叩きつけ、疾風が怒号する中で、Jupiter による3000年間の拷問に耐えており、今後も拷問の日々は続くだろう。しかし彼はそれらの苦悩の日々を楽しみをもって迎える。それは、Jupiter が没落する日が必ず来るという予見を持っており、その時 Jupiter 自身が彼と同じ地獄の責苦を受けて破滅するさまをありありと認識するからである。引用 1 に続いて彼は次のように語っている。

- (15) Disdain! Ah no! I pity thee. What ruin  
 Will hunt thee undefended through wide Heaven!  
 How will thy soul, cloven to its depth with terror,  
 Gape like a hell within! I speak in grief,  
 Not exultation, for I hate no more,  
 As then ere misery made me wise. (I, 53-58)

昔の憎しみに盲いた自分だったら没落を歓喜し、没落者を軽蔑しただろう。

しかし今は自らの苦しみによって「賢く」なっており、哀れみと悲しみが生じている。そこで、かつて Jupiter に叩きつけた「呪い」を思い起こしたくなる。それは呪った時の憎悪を払い落とすためであり、呪いの効力 (power) まで捨てるためではない。また、後で見るように効力は捨てられる性格のものではない。<sup>7</sup> 回想は孤独で行われるのではなく、まわりの自然との対話によって行われる。拷問の3000年間、彼はただ一人だったのではなく、山々、空気、泉、疾風、地球がまわりに常にいて共に苦しんでいたのである。呪いを彼は思い出せないが、自然はそれを大切に記憶しており、ただ口外できない事情がある。長いやりとりのうえ、やっと思い起こされた呪いは次のようなものである。

- (16) Fiend, I defy thee! with a calm, fixed mind,  
 All that thou canst inflict I bid thee do;  
 Foul Tyrant both of Gods and Human-kind, . . .  
 Rain then thy plagues upon me here,  
 Ghastly disease, and frenzying fear; . . .
- Ay, do thy worst. . . .  
 . . . Be thy swift mischiefs sent  
 To blast mankind, from yon ethereal tower.  
 Let thy malignant spirit move  
 In darkness over those I love: . . .
- But thou, who art the God and Lord: O, thou, . . .  
 I curse thee! let a sufferer's curse  
 Clasp thee, his torturer, like remorse;

---

7 呪いの想起について、Prometheus は呪いを悔いて (repent)、全面的に取り消したという理解が定説である。しかし、呪いには取り消さなかった部分が含まれているように思われる。

Till thine Infinity shall be  
A robe of envenomed agony;  
And thine Omnipotence a crown of pain,  
To cling like burning gold round thy dissolving brain . . . .  
  
An awful Image of calm power  
Though now thou sittest, let the hour  
Come, when thou must appear to be  
That which thou art internally;  
And after many a false and fruitless crime  
Scorn track thy lagging fall through boundless space and time.  
  
(I, 262-301)

彼は「静かな、強固な精神」で Jupiter に挑む。私と人類とに災いを嵐のように降り注ぎたいれば注げ、お前の害毒を投じて人類を破滅させろ。しかし、私は屈しないで、お前を呪う。被害者の呪いが拷問者であるお前の心に焼き付けられ、「自責」(remorse) のようにこびりつけ。この自責が蓄積して、お前自らを破滅させるにいたる時よ来たれ。お前の悪事に対して我々は永久に嘲り、軽蔑 (scorn) で対応するのみだ。

3000年前、この呪いの怒号を聞いた時、山、泉、空気、疾風たちは震撼し、母親である地球も 'Misery!' と嘆いて、それが世界中にこだました。地球たちつまり社会の立場からすれば、神(god) とは、標準英語の辞典の定義、例えば 'Superhuman being worshipped as having power over nature & human fortunes'<sup>8</sup> と示されるような概念であるからであろう。彼らを支配、統治する力を失えば無秩序であり、混沌である。しかし Prometheus に言わせれば、もし彼がこうして抵抗しなかったら、彼らは Jupiter の全能の重圧の下で霧のように消滅しただろう。彼らは当初は苦悩したがやがて

---

8 *Concise Oxford Dictionary*, 1951, entry 'god'.

Prometheus の意図が理解できたらしく、3000年後の今日にいたるまで「その恐ろしい言葉」を「大切な言葉(a treasured spell)」として記憶しており、公言はできないが、「密かな喜びと希望でかみしめている」。従って、Prometheus が3000年前の呪いを想起して、その憎しみの言葉の激しさを後悔する時、地球はまたも'Misery!' 「陸よ海よ、泣きわめけ、泣き叫べ」、「守護者は倒れた、破れた」とわめきちらし、こだまたちもそれに応える。しかし「まだ征服されてはいない」と Ione に訂正される。ここには、Prometheusと地球たちの間に認識の時間的ずれが存在している。地球たちはPrometheusの認識に初めに反対し、後で従う。これは Prometheus [=forethought] と弟 Epimetheus [=after-thought]、思想家と大衆との差を表している。

ここで、呪いの効力 (power) と言う時、呪いのどの部分を指しているのだろうか。この呪いでは、Jupiter に悪事を挑む時、思い切りやれ、最悪をつくせ('do thy worst')と命じて、露悪的であることが顕著である。これは犯罪者に対して、犯罪を止めさせるのではなく、思い切りやらせる、そしてお前のしていることはこういうことだ、ということをはっきりと認識させる立場である。すると犯罪者自身が自分の与えている不幸を好ましいものではなく、嫌悪を覚えるようになる。犯罪の続行につれて後悔(remorse) - 自責 - が蓄積する(thought by thought)。自責は自己破壊に高まって、自ら自滅する。犯罪は偽であり、実現しない (false and fruitless crime) という犯罪学的真理とでもいうべき発想が見られる。<sup>9</sup> またこういう真理を先見者が Jupiter に教育する姿勢もうかがわれる。呪いの中にあるこの決定性、これが呪いの

9 同じ罪の理論はShelleyの初期の詩 *Queen Mab: A Philosophical Poem* (1813) に見られる。豪華な宮殿の中で豪華な暮らしをしている王が、回りの臣民の苦しみ、不幸を見聞きしているうちに、彼の人間としての本性が、そういう自己の暮らしを嫌がり、自己を責め、不眠に陥るさまを描いている (Is it strange That... His soul asserts not its humanity?... That man's mild nature rises not in war Against a king's employ? No-'tis not strange. [III, 88-95])。この詩はフランス啓蒙主義の唯物論に拠った世界観を展開している。神は存在しない。自然は神なしで自足的に、それ自身の法則をもって、存在する。悪は人間の本性であるという考えは、神が存在するという考えと同じく誤っている。そういう悪や神は、王と宗教家が自らの罪を弁護するために作り上げた虚構である (Man's evil nature, that apology Which kings who rule, and cowards who crouch, set up For their unnumbered crimes, ... [IV, 76-89])。確かに悪は存在するが、それは自足的自然が作ったものであり、また作ったものであるから、自然はそれを取り消す、浄化することができ (earth in itself Contains at once the evil and the cure. [III, 80-81])。

「効力」であり、従ってこれは取り消すことができない。

過去3000年にわたり、将来も続くであろう Prometheus の忍耐の支えになっているものは、Jupiter を容赦なく引きずり落とす時が来るという認識であった。その認識がこの発想の中に含まれている。つまり、Jupiter を引きずり落とすのは Prometheus ではなく「時」が引きずり落とすのである(I, 48)。それは Prometheus の意志によってではなく、Jupiter の行為そのものの帰結—そして行為と結果はある必然性によって結ばれている—として実現するという発想である。「時」は「応報の時」(the retributive hour [I, 406])とも呼ばれている。呪いの効力は失いたくないだけでなく失えないものである。ただし、この段階では、Jupiter の没落と、呪いの効力は認識ではなく、希望として表明されている (let them not lose it now [72], let the hour Come [297-298])。3000年前の Prometheus は希望にとどまり、現代の Prometheus にいたって確固たる認識に達している (till some great truth is loosened)。そのため、前者は 'hate, disdain' に彩られ、没落後も永久に 'scorn' が彼を追跡する(301) が、後者ではそれが払拭され、'pity' の余裕が生じており、Jupiter 没落後は、何事もなかったかのように忘れられてしまう。呪いの想起はこのような思想の進歩—thought by thought—における雪片一枚の付加—を表している。

## VI

呪いの想起に引き続いて新たな拷問の場面が展開する(325-634)。これは冒頭の身体的、物理的拷問とは様相を異にし、精神的、思想的拷問になっている。

拷問は神の使い Mercury が率いる Furies(ギリシア神話のフューリー、Earth の娘で、翼を持ち、髪は蛇の復讐の女神たち)によって行われる。ここでは、Furies の中に Geryon, Gorgon, Sphinx, Chimaera などの恐ろしい怪物も含まれている。が、それらはいつの間に人間の顔に変わっている。というより、人間が Furies の実体である。前者怪物たちは、地獄の中にも

いないような恐ろしい、醜悪なものである。しかし Prometheus をそれら以上に苦しめるのは、人間の顔をした、人間である Furies である。その中でももっとも、致命的に苦しめるのはフランス人たち、そしてもっともやさしかるべきイエスの顔である。血塗られた戦場から、飢饉で荒廃した都市から、血が金で買われる教皇選挙会議から、白熱する溶鉱炉から、Furies が拷問にやって来る。最後に最もつらい二つの拷問。一つは幻滅の民、フランス国民である。彼らは「自然の聖なる標語」である「真理、自由、愛」を色鮮やかに描いた旗を掲げて立ち上がり、諸国民が共鳴して群がり、それらの語を一斉に歓呼する。突然天から混乱が舞い降り、争い、欺瞞、恐怖が生まれ、圧政者たちが介入して、獲物を山分けする。もう一つは、十字架に釘付けにされ、苦悶の眼を見開いたイエスとおぼしき者の顔。彼の言葉が灯した「信仰」に群がる奴隷たちが、「賢い人々、柔和な人々、高邁な人々、正義の人々」を彼に似ているがゆえに憎むようになった。かくして彼の言葉は真理、平和、憐れみを枯らす毒となって蔓延した。涙を流し、血塗られたその死に顔は、彼の言葉が彼の名において灯した信仰を嘆いている。

これは Prometheus を殺すほどに強力な拷問であるが、彼は神であるため死ぬことができない。しかし結局これにも打ち勝つ。悪を行う Jupiter を憐れむだけでなく、これが拷問として感じられない人を憐れむことによって (And yet I pity those they torture not [I, 693]). Furies は退散し、霧消する。死にたくなるほど苦しい拷問にあってもなおかつ憐れむ余裕を与えたのは、やはり未来への予見である。Furies は絶望を迫るものであり、Prometheus が彼らに打ち勝ったのは、希望が絶望より強かったからである。彼には未来の「時」がありありと見えているのである。(引用 2)

拷問は将来現存しなくなり、きれいに忘却されてしまう「時」が来る。その「時」は、もちろん Jupiter を引きずり落とす (I, 50) だけでなく、Jupiter 自身消滅し、彼と彼の所業の痕跡すら消え去った、何か新しい世界が開けている時代である。それは地球たちが 3000 年にわたり、喜びにおいて反芻している「大切な言葉」(a treasured spell) が語られる時でもある。

これまで拷問を終始見守っていた母親の Earth は Jupiter の敗北を喜び、

瀕死の Prometheus を力づけるため、彼女の火口から「春の暖かい雲」の大群を招集する。彼らは火口＝「人間の思想の洞窟」に眠り、「地球を囲む大気」を飛ぶ「明敏な美しい精たち（蒸気）」である。第二幕で見た、山頂から朝日に照らされて立ちのぼる霧は、近景で見ると「人間の思想」だったのである。

従って、Jupiter から派遣された極悪な Furies は天から降りしきる雪であり、Asia たちとは姉妹関係にある。降り積もった雪は厚さを増し、氷河のゆるい流れとなって重量を増し、耐えきれずに亀裂する。第二幕で見られた、やがて起こる雪崩と、それに連動するであろう雪崩は、フランス国民が革命を起こし、ヨーロッパ諸国が連動する動きを見せている（と Shelleyが見た、または希望した）姿だったことがわかる。従って、「神に挑む精神たち」とはそれらの革命の企画者たち、その基礎付けとなったフランス啓蒙期の思想家たち、その中には当然神を否定する無神論者、唯物論者たちも入るであろう。また、Godwin, Paine なども含まれるだろう。そして、Furies とは、各国の君主、政治、宗教界の人々、それらの体制を支持する人々が指されており、さらに革命を行い挫折する（と見られた）フランス国民、ヨーロッパの人々、イエスとイエスを中心として形成されてきた宗教界の人々までも含まれることになる。この意味では、Prometheus と Jupiter は兄弟である、つまりみな人間である。そして精神たちの中で積み上げられた思想によって作られる「真理」とは、自由、平等、兄弟愛という理念を含むフランスの国家理念であり、また Asia たちの移動に要したであろう時間を考慮すれば、そのような思想家、革命家たちの流れをくむ未来の人々によって実現されるであろう理想社会の理念を指している。

ここで、第二幕の世界パノラマ（引用13）の再整理が可能である。Asia たちの前に広がる広大な世界を覆う濃淡さまざまな多彩なもやと霧の湖、山頂に降りしきる雪、峡谷を流れる氷河、雪崩、滝、山頂から吹きつける雹と疾風—その全てが Oceanides であり、全て人、人、人、... である。しかも、現在の人だけでなく、（イエス、Shakespeare を含む）過去と未来（今、Prometheus の援護に駆けつける人間の思想たちは以下見るように未来の人間である）の人々である。この世界の中で、今多数派を占めるのは「春の暖か



パの音である。戦争は Jupiter との戦いであり、Jupiter の軍は破れたらしい。彼の手下である圧政者の旗は引き裂かれ、宗教家たちの信条は擦り切れ、塵になってしまっている。「自由! 希望! 死! 勝利! 」という勝鬨の叫びが聞こえる。それらの叫びを包み込むような音楽が聞こえる。それは「愛の魂」であり、Prometheus に始まり、終わる予言である。Prometheus が見ている未来図、地球たちが記憶する 'a treasured spell' は音楽でもある。Asia たちを導く霧は音楽であった。地底で彼女らを待つ 'a voice unspoken' [引用4] もそういう音楽であるのだろう。戦場の勝利のラッパはそのような予言を伝えている。

海戦の後。海の嵐は終わろうとしている。波は高いが、大きな虹が出ている。嵐は、その全てが雷電によって引き裂かれた捕虜の黒雲の軍団を率いて、勝ち誇って敗走した。海上には大艦隊の軍艦がもみがらのように散らばっている。その船の一つの近くで、つかまっていた船板の一片を敵兵に渡し、自らは死ぬ時の兵士の溜め息、これが二人目である。

圧政者の引き裂かれた旗、擦り切れ、塵となった信条 (creeds) への言及は、Jupiter と、その所業 (神を奉ずる宗教と王政) が消滅し、跡形もなく忘れ去られた「時」 (引用2) という Prometheus の予見を表している。従って予見されている未来の時は千から万単位の年が経過した遠い世界であろうと推論される。

三人目は、賢人の枕もとに訪れた夢である。それはかつて 'Pity, eloquence, and woe' の火を灯した夢である。pity→eloquence→woe というパターンは、イエスの描写に似ている。

- (18) *Fury*. Behold an emblem: those who do endure  
Deep wrongs for man, and scorn, and chains, but heap  
Thousandfold torment on themselves and him. (I, 594-596)

イエスの教説→抑圧的宗教の形成、フランス革命→挫折、Prometheusの火の発見→拷問、これらは共通のパタン〈P → N〉(P=positive, N=negative)

を示している。

四人目は詩人の口さぶ詩句。詩人は思想の届かない所に思想をとらえ、真理を生み出すものである。そのようにして捉えられた真理を表す詩句が四人目である。

五人目（女性兵士）は「愛の形」を目撃したと伝える。これは、一人目の精が捉えた「愛の魂」つまり、Prometheus の予見した世界の姿と同一のものであろう。そのようなかたちが訪れた世界は明るくなったが、それが通り過ぎた背後には「破滅」(Ruin)が影のようにつきまとっており、縛られて気の狂った賢者たち、首を切り落とされた愛国者、非難することなく死んでいった若者たちが見えたと報告する。しかし今 Prometheus の微笑みを見て、それらは遠い過去の思い出になってしまったと譲歩する。

六人目（女性兵士）は五人目と同じく悲観的である。「荒廃」(Desolation) は非常にデリケートな怪物で、やさしい希望で人を欺く。Prometheus や一人目、五人目が「愛」として見、また聞いているものは、実は「荒廃」である。Prometheus たちの予言は当たっていない。

このように、兵士たちの行動にややまとまりを欠き、中には Prometheus の期待を裏切るものもいるが、大勢としては、次のコーラスが示すように Prometheus に賛同している。

(19)

*Chorus.*

In the atmosphere [of human thought] we breathe,  
 As buds grow red when the snow-storms flee,  
 From Spring gathering up beneath,  
 Whose mild winds shake the elder brake,  
 And the wandering herdsmen know  
 That the white-thorn soon will blow:  
 Wisdom, Justice, Love, and Peace,  
 When they struggle to increase,  
 Are to us as soft winds be

To shepherd boys, the prophecy  
Which begins and ends in thee. (I, 790-800)

Prometheus の援軍は最初は勇ましく進軍するかに見えたが、あまり強力ではなく、行動も揃っていない。また、第一、第二の兵士の報告は Jupiter の没落が戦争によって実現されることを示しているが、Prometheus の予想では、彼が手を下すのではなく、Jupiter 自身の後悔—自責によって自滅するということであった。Prometheus と兵士たちの間にこのように食い違いも見られる。Pottle<sup>10</sup> は、第五、第六の精の歌を 'despair mingled with love' だと Ione がコメントしている(756-767) ことにも注目し、援軍の発言は全体として Furies の発言と同一内容である、と指摘している。確かにそれら全ての発言は、〈N and P〉の内容を持ち、Furies は〈P but N〉、spirits は〈N but P〉と焦点を変えているにすぎない。特に第三、第六の兵士は Furies と同じ主張である。

この食い違いは、呪いと呪いの後悔とに対して地球たちは初めは動揺、悲嘆するが、後に同意し楽しみにするという認識の時間的ずれに対応するのであろう。地球たちは Prometheus ほどには遠目がきかない、思想家(heaven-defying minds) と大衆には差がある、ということを示唆している。また、先に見たように Prometheus と Jupiter は兄弟である、つまり前者の支持者たちである spirits と後者のいわば agents である Furies は同じく人間の集団であり、両グループは峻別できない。

結局、援軍は美しい(fair)が、Prometheus を慰めることはできない。Asia に再会できなければ、こうして持ちこたえた希望も空しい。

(20) Prometheus. How fair these airborne shapes! and yet I feel

---

10 Frederick A. Pottle, "The Role of Asia in the Dramatic Action of Shelley's *Prometheus Unbound*," George M. Ridenour, ed., *Shelley: A Collection of Critical Essays*, N.J.: Prentice-Hall, 1965, pp. 131ff.

Most vain all hope but love; and thou art far,  
Asia! (I, 807-809)

第一幕の全体を通して、Prometheus の忍耐を支えてきたものは、Jupiter が没落し、新世界が生まれるという希望である。しかし、この希望でさえ、愛がなければ、Asiaと再会できなければ空しいと言われる。第一幕は、Prometheus の沈んだ気持ちで終わっている。第二幕に戻るに先立って、Prometheus と Asia が再会するというこの意味をしばらく考えてみたい。

再会は、単に男女がどこかで会うということではない。第二幕の初めて Panthea の眼の中に見られた第一のメッセージを見てみよう。

(21) *Asia.* Say not those smiles that we shall meet again  
Within that bright pavilion which their beams  
Shall build o'er the waste world? The dream is told.  
(II, i, 124-126)

Prometheus の微笑の光線が新しい天を作る。その下にその光を浴びて、旧世界が新世界に変貌する。この世界は数千数万年後の世界であろうと予想される。二人はそこで会うということである。（ここでは微笑は太陽としてイメージされている。）

次に、なぜ、Asia との再会か。次の引用が引用20に続いている。

(22) [Asia!] who, when my being overflowed,  
Wert like a golden chalice to bright wine  
Which else had sunk into the thirsty dust. (I, 809-811)

Asia は Prometheus の妻であるということに加えて、夫の思想のより正確な理解者、共鳴者でもある点でも特別であり、金の杯のように貴重なものである。立派な共鳴者がいなければ、彼の存在、彼の思想は、きらきら光る

極上ワインを乾いた土に注いでも同じである。この要求は第一幕では満たされない。Asia は 'follow' の誘いを無視する。しかし第二幕の Asia の旅は、思想を十分にくみとった Asia を中核として共鳴が広がり、強化するさまを表している。

再会にはもう一つ別の次元での理解がある。[Prometheus=氷河=heaven-defying minds (思想家集団)]、[Asia=霧]、[春風=思想への共鳴者、支持者] とすると、この両者がどこか特定の場所で会うということを意味する。ただし、賛同者が次第に増えながら、谷間、森、山を通るうちにふくれあがったプロセスは、前に見たように空間的移動ではなく、同じ世界内での集団の時間における状態の変化でなければならない。

簡単な抽象的な例を考えてみよう。A, B, C, ... J の10人のグループで、A が案 A' を提案する。賛成3、反対5、棄権2。案 A' は否決される。A はなお A' にこだわる。時間をおいて、再提案、再投票。賛成6、反対2、棄権2で可決。その間に、反対者が支持に、支持者が中立に、等々の異動があったのかもしれない。A と B, ... J とは、A' について合意した。これを、A と残りとは A' において (再) 会した ([re]united on A')、と言い換えてもよい。

もっと複雑な抽象化した例を考えてみよう。国家の体制についてある案が浮かぶ。次第に固まって、世に提案する。ある人々は共鳴、賛同、支持する。他の人々は反対、阻止、迫害する。何百年、何千年とたつうちに、賛成者が増え、投票、武力行使、等々によって案を通そうとする。反対意見も増強するが、ついに可決される。しかし、時の経過につれ、案は変更、修正されもとの形をとどめなくなったり、または、廃止される場合さえある。支持者集団の中には、この経緯を見て、原案を断念し、脱落する人も出てくる。反対者、無関心者から、新たに支持派にまわる人もいる。支持者の中核にいる人々は、何としても支持者を増やし、脱落者を引き止め、原案通過を狙いたい。その実現の日を熱烈に待ち望む。その思いが共感の輪を拡大し、強化していく場合もある。草案を命がけで愛する大集団が増強を続けていく。案の側から見ると、案は強力な魅力、磁力をもったものと言える。こうして世論は醸成し熱狂的となり、投票、審議、暴力等々によって、ついに案が採用される

日が来る。この時、思想家集団と支持者グループとは原案において、新世界において(再)会したとすることができる。Prometheus にとって、先見、希望は、愛がなければ、そして Asia と再会できなければ、空しいという時、このような意味もこめられている。

## VII

以上、第一幕を通覧した。その際、第二幕の世界俯瞰(引用13)の視点から Prometheus の行動を精査した。引用13の岩山の頂きに戻ろう。考えてみれば、Asia たちは大変な仕事に乗り出したものである。再会するためには理想世界に行く、実現しなければならない。世界革命を達成しなければならない。妻であったにもかかわらず、'Follow' の誘いを最初は無視し、次に逡巡した後で、ようやく同意した理由も分かる。しかし、今やこのように急速に上昇した蒸気を前にして誰も引き返すことはできない。最初は甘美だった音楽は痛いもの、圧倒する轟音になっている。彼女たちも Maenads になろうとしている。酒は芳醇なきらきら光るワインであった。彼女はかなり飲んで酩酊し、眼がまわり(dizzy)かけている。こういう状態での彼女たちにとって、引用14の誘いは、その通るべき道筋が、陶酔の極みに向かうものであるとともに、いかに険しい、大胆なものであるかを物語っている。

それゆえ、我々はここでストップしたい。ただ、クイズの答えを盗み見る気持ちで、達成された新世界をのぞいてこの研究を終りたい。

## VIII

今や火道の奥深くに着いて、マグマとおぼしき Demogorgon との質疑の最後で 'Prometheus shall arise Henceforth the sun of this rejoicing world: When shall the destined hour arrive?' [II, iv, 126-128] と Asia が尋ねた時、'Behold!' と Demogorgon は答え、実際に世界が動き出す。火道から火口を構成する岩石が裂け、虹色の翼の馬に引かれ、それぞれ荒々し

い眼の御者に御される馬車が、噴出する黒雲を突き破り、疾駆する。

(23) *Demogorgon.* These are the immortal Hours,  
Of whom thou didst demand. One waits for thee.

[II, iv, 140-141]

Hours (ギリシア神話でホーラエたち、季節、輪廻、秩序の女神たち) の一台に Demogorgon が乗り、天空に巨大な黒雲を残して、星間を駆け抜けて行き、第三幕において「時が Jupiter を引きずり下ろす」という Prometheus の予見が実現する。火口で待つもう一台の馬車(Hour)に Asia と Panthea が乗り込み、雪山の頂きの雲を経て、コーカサスに着く。そこは Prometheus、Hercules (彼は Prometheus の縛めを解く)、Ione、地球、Spirits の全員が揃っている (III, iii)。ここで、馬車の御者 (the Spirit of the Hour) は人間の諸都市の上空に飛んで不思議な貝の笛を吹いてくるよう Prometheus に命ぜられる。「強力な音楽」、「雷鳴と澄んだこだま」となって響く「達成されるべき声」を笛に吹き込むのが彼の任務である。任務を果たして帰還した the Spirit of the Hour (「時の空気」とも、「時代精神」[the spirit of the times]とも訳せる) の報告によれば、世界は次のように変わっている。

- 1) 大気と太陽光が愛の感覚に浸透されている。
- 2) 人間の顔に、こびへつらう、踏みにじる、憎む、軽蔑する、恐れる、顔をしかめる、震える、命令する、欺く、疑う、などの表情が見られない。女は率直で、美しく、優しく、誇らしくなり、嫉妬、妬み、恥じらいが見られない。
- 3) 玉座には王がない。玉座、祭壇、裁判席、刑務所、笏、教皇冠、剣、鎖、法典、などが無人の王宮、神殿のまわりで、消滅はしていないが無視されており、忘れられた時代の名声を刻んだオペリスクのように、朽ち果てようとしている。
- 4) 人間は、醜悪な仮面が剥げ落ち、笏をもたず、自由で、平等で、無階級で、部族、国籍がなくなっている。畏敬、崇拜、階位がなくなり、各

人が自己の王であり、正義、優しさ、賢さを備えている。かといって情熱がなくなっているわけではない。

以上のような特質をもった世界への期待が Prometheus を支えた「時」であり、Asia を待っていた「声」であった。その「時」が今来た、その声は今発せられたわけである。その時は Shelley の時代から千または万の単位の年をへて実現されると予想されている。Prometheus の予想では、世界はそのような状態に次第に近づいていく。Shelley の時代からわずか 200 年を隔てた今日、そういう兆候は見られるだろうか。世界では様々な変化が起こった。たしかに、王国は減り、共和国は増えた。それに応じて、2) や 3) に列挙されるいくつかは顕著になっていると言える。しかし項目によっては、より大規模、悪質になったものもある。例えば欺き、憎む、戦争、など。Shelley の予想を裏切って、より民主的になり、繁栄を続ける王国もあれば、より抑圧的になったり、滅びたりした共和国もある。無視または転用される王宮も増えたが、革命家の銅像も打ち倒されて、子供の遊び場になった所もある。通信の発達により、Prometheus の声と似た声はより高く、広く聞かれるようになったように思える。そしてより多くの人々が彼の予期と似た希望を抱くようになったように思われる。わずかな時間差なので判定材料にはなりにくい。